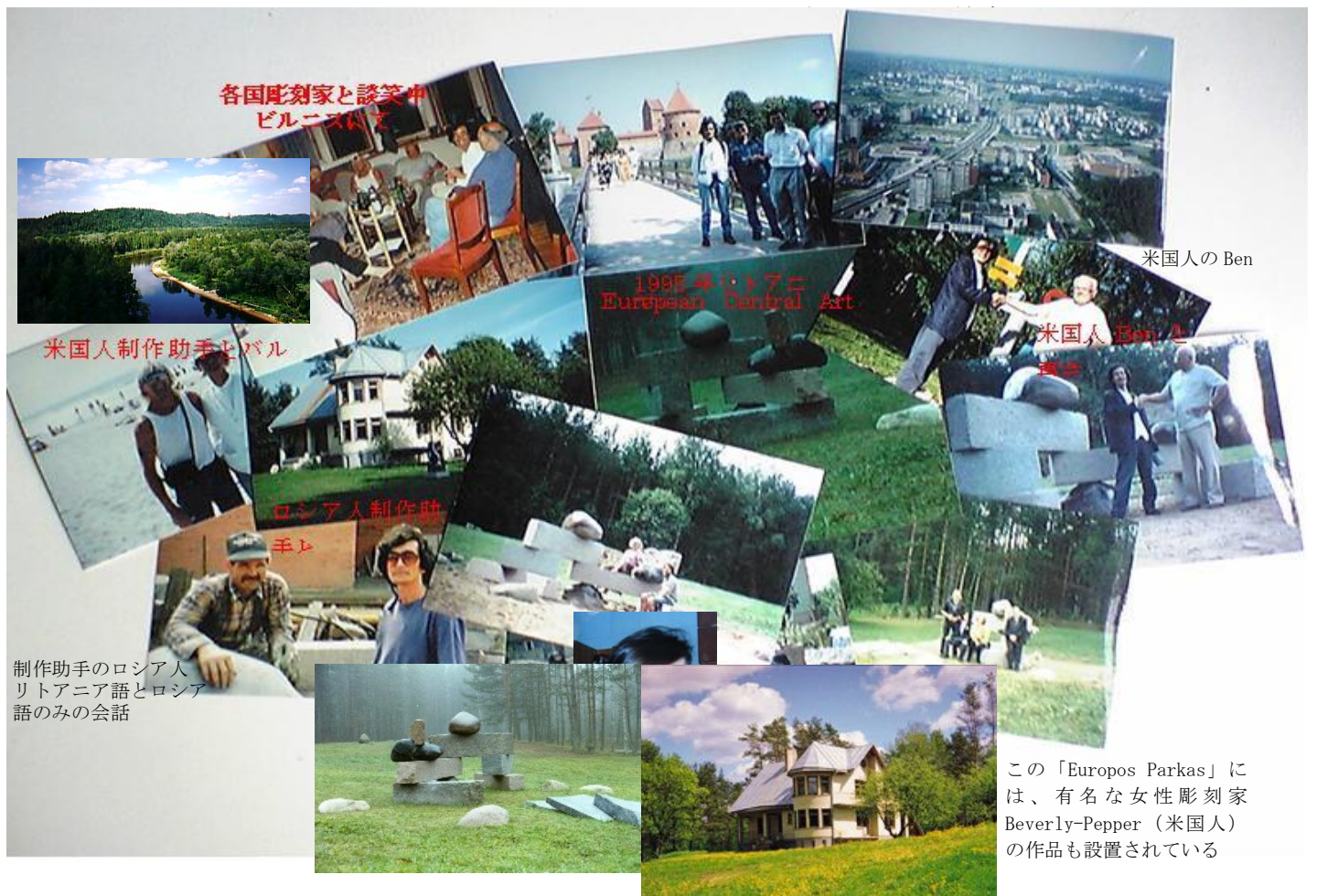


今から16年前の秋、一通の Air Mail 便が届きました。東ヨーロッパのリトアニアの「Europos Parkas・ヨーロッパ公園美術館」で開かれる国際彫刻シンポジウムの招待状でした。リトアニアの当時は、ロシアから独立して間もない頃で、情報もほとんどありませんでした。かつてユダヤ人のビザ発給で尽力した杉原千畝の話を知っている程度でした。招かれたことはたいへん光栄でしたが、情報不足な上に資金不足で判断に随分と迷いました。しかしシンポジウム当局が、現地のトヨタ自動車の支援を取り付けてくれました。ようやく弾みが生まれ参加の意思表示ができたのは翌年の春ごろになりました。

期間は7月～8月、モスクワ経由でリトアニアの首都、ビルニスへ入国できたのは7月初旬ぎりぎりになりました。薄暗いビルニス空港のロビーで迎えの人を待っていると、突然若い男性から「Mr Ihara?」っと流暢な英語で話しかけてきました。事前に情報交換をしていたお陰で、スムーズに支障もなく私を目的地へ案内してくれました。空港から車で北へ約1時間余り走ると、広大な白樺の森を切り開いた空間が広がっていました。大学のキャンパスぐらいの広さに彫刻が点在している瀟洒な公園美術館の古い施設が建っていました。真夏とは言え森から吹き抜ける風が、冷気を運び心地よく感じました。周辺には大小さまざまな作品群が森を背景に永久展示（現在71点余り）されていました。すでに到着していた白人系の彫刻家達も私を迎えに集まってきましたが、その中には初対面でしたが米国で偶然同じ美術館で展示した Ben という作家とも会う事ができました。はじめはみんな寡黙で私の稚拙な英語に少々戸惑っていました。やがて作品写真などを交換するうちに同じ石材を扱う地中海のキプロス島から来た美術教師の Kyproso とも近くなりました。彼とは毎日、ビルニス空港近くにあった石材工場へ通いながら制作を共にしました。お互いの助手は、リトアニア人とロシア人でしたが、言葉の壁を越えて作品は完成できました。

やがて私たちの創った作品は、「Europos Parkas」に搬入され、それぞれのイメージに沿った場に設置しました。このエリアの冬は毎年、豪雪で作品は埋もれ雪景色に一変し、人の気配はなく静寂な雰囲気になります。春には植物が芽吹くように雪が融けて作品の頭頂部が、少しずつ見え隠れしながら小鳥の音が聞こえ始めます。そして初夏を迎えた白樺の森には、林立する彫刻群と鑑賞者の来訪で賑わいをみせます。そして夜ともなれば幻想的な白夜の光に惹かれて、森を散策しながら思索にふける幸せな時間を享受できました。言葉の彼方に真人（まこと）がみえた「東欧のできごと」でした、。。。。。

続きはまたの機会に、。。。彫刻家 いはらよしただ



こころと環境に優しい Earth-Worker いはらよしただ